目白大学　人文学研究
第18号　2022年　45－64

動名詞の「外置」の認可をめぐって

On the Licensing of “Extraposition” of Gerunds

志澤　剛
Takashi SHIZAWA

Keywords：gerund, extraposition, copula sentence, predication, internal/external factor
キーワード：動名詞、外置、コピュラ文、叙述、内的／外的要因

1．はじめに

一般的に、いわゆる「外置」という統語操作は、that節および to不定詞節に適用される操作であり、これが動名詞節に適用されることはないとされる（cf. Rosenbaum（1967）、Emonds（1976）、Quirk et al.（1985）など）。

（1）　a. *It would be surprising your being able to find a new job never occurred to me.
　　b. *It irritated him Mary’s having so many books were few.
　　c. *It seems to satisfy him reading magazines if you ask.
（Emonds（1976：125））

一方で、Postal（1974）、安井他（1976）、高橋（2009）などでは、特定の意味範疇の述語が述部に生起する場合に、動名詞が文末に生起できると指摘されている[1)]。

（2）　a. It is useless talking to him.（Postal（1974：14））
　　b. It’s pleasant talking to him.（安井他（1976：225））
　　c. It’s no good just waiting for people to do something for you.
（高橋（2009：102））

本稿は、こうした動名詞の「外置」構文を考察対象の中心とした上で、比較対象としてその対となる動名詞主語文を取り上げ、それらの認可条件を意味論・語用論的観点から提案するも

しざわたかし：看護学部看護学科准教授

のである。本稿の主張は以下のとおりである。

（3）「動名詞 + be + 述語」の形式を持つ動名詞主語文と「It + be + 述語 + 動名詞」の形式を持つ動名詞外置文の選択は、述部の意味に反映される「話者の評価」が依拠する要因のありかによって決まる。話者の評価が動名詞の表す動作に内在する「内的要因」に基づくものであれば動名詞主語文が、動名詞が表す動作を取り巻く状況・環境といった「外的要因」に基づくものであれば外置文が認可・選択される。

詳しい議論に入る前に、ここで本稿における「外置」という用語の扱いについて触れておこう。一般的にthat 節やto 不定詞節といった補文に適用される「外置」とは、補文を主語位置から文末に移動させ、「itが主語となり、補文が文末に来るような文」（寺澤（編）（2002：241））を作る統語操作のことである。この定義にしたがえば、（2）のように動名詞が文末に生起する文も、「外置」の適用を受けた「外置文」であるように見える。ところが、先述した通り、Rosenbaum（1967）や Emonds（1976）は、動名詞に外置操作は適用できないとする立場から、動名詞の文末生起を認めていない。一方で、述部の意味次第で動名詞が文末に生起できるとする安井他（1976）や高橋（2009）も、それは「外置」という統語操作の結果ではなく、形容詞の選択する補部である（つまり、派生の段階でもともとその位置に生起する）という立場である[2)]。すなわち、厳密に言えば、動名詞の文末生起を認める立場であっても認めない立場であっても、動名詞を統語操作によって「外置」することはないとする見解で一致している。したがって、動名詞に限って言えば、「外置」という統語操作は存在しないということになるだろう。この点において、本稿も説明の道具として動名詞に「外置」という統語操作を仮定しないという意味では先行研究と一致している。

本稿は、動名詞の文末生起を認める立場をとるという点においては、安井他（1976）や高橋（2009）と同様である。しかしながら、動名詞を形容詞の選択する補部であるという彼らの主張に与するものではない。ただし、動名詞が意味上でも形式上でも主語になる文と、形式的にitが主語となり、動名詞補文が文末に来る文を明確に区別できる一般的な用語は現状では「外置」以外に存在しない。そういう意味で、本稿は理論的に中立の立場から、前者を「動名詞主語文」、後者を便宜的に「（動名詞）外置文」と呼ぶこととする[3)]。

2. 先行研究とその問題点

上で述べたように、本稿は（2）のような動名詞の文末生起を認める立場をとる。また、「外置」や Postal（1974）の ‘Shift’ といった統語上の移動操作を仮定することもない。したがって、ここでは、この二点において同様の立場をとる安井他（1976）、高橋（2009）の分析を概観し、その問題点を指摘したい。

2. 1. 安井・秋山・中村（1976）

安井他（1976）は、形容詞の分析の一環として、当該構文に触れている。彼らは、文末に生起した動名詞節を述語形容詞の「補助部」であるとし、動名詞節を補助部として選択する形容詞として以下のリストを挙げている。

（4） easy, hard, irritating, nice, pleasant, regrettable, useless, wrong, etc,

（安井他（1976：225））

彼らによると、当該構文に現れ得る形容詞は「感情的色彩を持つ形容詞」に限られているという（安藤（2005：437）の「情緒性の強いクラス」も参照されたい）。

（5） a. It is pleasant/nice/regrettable/useless/hard/easy/wrong talking to him.
b. It is irritating having a puncture when one's in a hurry.

（安井他（1976：225））

したがって、そうした感情的色彩を持たない形容詞は「補助部」として動名詞を選択できないという。

（6） a. * It is illegal killing birds.
b. * It is important saving money.
c. * It wasn't understandable owing two cars.

（安井他（1976：225））

また、彼らはPostal（1974:15）を援用し、意味上の主語が明示化された動名詞が当該構文に生起できないと主張する[4)]。

（7） a. * It would be useless my talking to Melvin.
b. * It is hard John's kissing Mary.

（安井他（1976：225））

なお、安井他（1976）の当該構文に対する言及はこうした事実の指摘のみにとどまっており、これ以上の詳細な分析はない。

2. 2. 高橋（2009）

次に、高橋（2009）の分析を見てみよう。高橋は、特定の述語が述部に生起する場合に動

名詞が文末に生起できるというPostal（1974）や安井他（1976）の主張を基本的には踏襲しつつも、BNCを用いて実際の使用頻度の面からその妥当性を検証している。

高橋が［It +（助動詞）+ be動詞 + 形容詞／名詞 + 動名詞］（＝外置文）、および［動名詞 +（助動詞）+ be動詞 + 形容詞／名詞］（＝動名詞主語文）の語順の用例をBNCで検索した結果は、以下のとおりである。

（8）　高橋（2009）によるBNC用例検索の結果（筆者による再編集[5)]）

外置文（全531例）			動名詞主語文（全413例）		
述語	用例数	割合（%）	述語	用例数	割合（%）
good	145	27.3	easy	153	37.0
use	133	25.0	difficult	151	36.6
worth	87	16.4	fun	41	9.9
worthwhile	56	10.5	good	29	7.0
well	34	6.4	bad	17	4.1
fun	22	4.1	pointless	10	2.4
bad	18	3.4	use	5	1.2
difficult	16	3.0	worth	4	1.0
easy	10	1.9	well	3	0.7
pointless	10	1.9	worth	0	0

高橋による観察の要点をまとめると、以下のようになる。

（9）　外置文の特徴

a. goodやuseは否定表現のnoと共起しやすい。

b. worth、worthwhile、wellは、肯定文で外置を許す傾向がある。

c. well は all very を、bad は enough を伴う傾向がある。

d. 上記 a-c から、動名詞の‘外置’は、述部に生起する１つの語彙が持つ性質ではなく、いくつかの語彙がまとまって形成する意味が許す構文であると言える。

e. 述部全体の意味が「価値観」を表す場合、動名詞が「外置」される傾向が強くなる。

（10）　動名詞主語文の特徴

a. 外置文で上位にランクした述語（goodや use）が動名詞主語では下位に、外置文で下位にランクした述語（easyやdifficult）が動名詞主語文では上位にランクされるといった、逆転現象が起こっている。

b. aの傾向から、動名詞主語文も述語の意味がその認可の条件となっていると推察される。

（11） a. 文末に動名詞を要求する述部
no good, no use, worth（肯定形），worthwhile（肯定形），all very well（肯定形），bad enough（肯定形）
b. 主語位置に動名詞を要求する述部
easy（肯定形、否定形）, difficult（肯定形）

この観察の結果、導き出されたのが以下の定式である[6)]。

（12） a. It +「価値観」を表す述部 + 動名詞
b. 動名詞 +「難易」を表す述部　（高橋（2009：108））

以上のように、高橋は構文選択の要因を修飾語句を含めた述部全体の意味に求め、外置文は動名詞主語文から統語操作により派生されるのではなく、動名詞が最初から述部の補部として選択されて文末に存在していると主張している。

2. 3. 先行研究の問題点

ここまで見たように、安井他（1976）も高橋（2009）も動名詞の外置文が容認される要因として「述部の意味」に着目している。

しかし、安井他（1976）については、上で指摘したように、動名詞の外置文を許す形容詞が「感情的色彩を持つ形容詞」に限られているとする主張に明確な根拠や詳細な分析はない。また、彼らの言う「感情的色彩を持つ形容詞」自体、その分類基準が明確ではなく、直観的な記述であるという他ない。

さらに、確かに用例数自体は多いものではないが、彼らが非文としている illegal、important、understandable が述語の場合でも動名詞の外置文が許される場合がある。その意味でも彼らの主張に妥当性を認めることは難しい。

（13） a. It's not **illegal** being a human being in any country, but it is **illegal** entering a country without a legal process.
（https://www.facebook.com/WesternJournalism/posts/10153595533328984）
b. In a situation like this, it is **important** making a good decision on a trip partner, reason being that the personality of your partner will have a strong influence on the trip which is why it is better getting a trip partner with a common mind.
（https://www.soegjobs.com/how-students-travel-tips/）
c. In your situation it is **understandable** having palliative care.
（https://www.cancerresearchuk.org/about-cancer/cancer-chat/thread/caring-for-

the-carer-carers-week-2020）

一方、高橋（2009）についても、（12）の定式はBNC検索による統計から自然に導かれるものとして一定の妥当性は認められるものの、なぜそのような傾向が生じるのかという部分には結局踏み込んでいない。さらに、（8）の表にもある通り、頻度に関して逆転現象はあるが、同じ形容詞が動名詞主語文と外置文の両方を許す場合もあり、「価値観」と「難易」の区分が両構文を分ける決定的な差となっているとは言い難い。また、確かに（no）good、（no）use、worth などは「価値観」を表し、easyやdifficultは「難易」を表すというのは、その語彙的な意味からも直観的に受け入れやすいように思われる。しかしながら、（割合は低くとも）両方の構文に出現しうる fun や（13）のillegal、important、understandable などの周辺的事例は、少なくとも語彙的な意味から「価値観」や「難易」を表すとは言いにくい。こうした点を（12）で網羅的に説明することは難しいように思われる。

さらに、両者とも両構文の述部の意味という語彙・句レベルの特徴にのみ着目しており、両構文が使用される文脈・環境の違いなど、談話レベルの違いには目を向けていない。たとえ同じ形容詞が述部に用いられている場合であっても、形の違う両構文には、意味や使用に必ず違いがあるはずである。

以上のように、安井他（1976）も高橋（2009）も、動名詞の外置文には述部の意味に一定の傾向があるという指摘に留まっており、その傾向が生じる要因や、両者の使用面における違いについては触れていないという点で同じ問題を抱えていると言える。

3. 認可条件の提案：内的要因と外的要因

前節では、動名詞の外置文を扱う代表的な先行研究について概観し、その問題点を指摘した。本節では、本稿独自の分析から動名詞外置文と動名詞主語文の認可条件を提案し、両構文の認可・選択の仕組みのメカニズムを明らかにしたい。

3. 1. 叙述文としての動名詞外置文／動名詞主語文：叙述の対象の違い

ここで、動名詞外置文と動名詞主語文の認可条件を探るにあたり、両構文の形式面に着目してみよう。表層上の構造は、どちらもbe動詞を主動詞とするコピュラ文である。

“A is B” の形式をとる英語のコピュラ文は、研究者により多少の分類の違いはあるが、一般的に大きく分けて「叙述文（predicational sentences）」と「指定文（specificational sentences）」の２つの種類が認められている（cf. Declerck（1988））。では、本稿で話題としている動名詞主語文と動名詞外置文はいずれに属するか。この２つの構文はいずれも補部が形容詞であり、したがって形容詞が叙述用法的に使用されていることになる。ゆえにどちらの構文も必然的に叙述文に分類されることになる。

叙述文とは、その名の通り、「主語名詞句の指示対象について何かを叙述する文（predicate something of the referent of the subject NP)」(Declerck（1988：55）のことである。具体的には、be動詞の補部位置に生起する要素が、主語名詞句の特徴、役割、機能、クラス（＝類）などを表す。以下がその典型的な例である。

（14） a. John is a teacher.（= John teaches.）
b. Mary is a pretty girl.
c. John is the cleverest student of them all.　（Declerck（1988：55））

（14a）では、名詞句 a teacher が主語 John の役割を叙述している。（14b）の名詞句 a pretty girl は Mary の属する集合のクラスを叙述し、“Mary is a member of the set of pretty girls.” と解釈される。（14c）では、補部 the cleverest student of them all は John の特徴を記述している。

安井他（1976）や高橋（2009）の主張にしたがい、両構文が派生関係にないものとし、Bolinger（1977）の isomorphism の仮説（one form for one meaning, and one meaning for one form）に従うと仮定しよう。すると、同じ叙述文であるとしても、その性格は異なることが推察される。次のペアを比較してみよう。

（15） a. Driving around in the hills is fun.
b. It's fun driving around in the hills.

叙述文という観点から（15）の２つの文を見た場合、述部の形容詞 fun の叙述対象が異なることに注目されたい。それは、（15a）における fun が動名詞節の Driving around in the hills を叙述の対象としているのに対し、（15b）における fun は It を叙述対象としているという点である。つまり、（15a）は driving around in the hills が fun であるのに対し、（15b）は it が fun なのである。この叙述対象の違いが、動名詞主語文と動名詞外置文の選択或いは認可を左右する要因を突き止めるカギとなる。

3. 2. 話者の評価基準：外的要因と内的要因

上で動名詞主語文と動名詞外置文では、述部の叙述対象が異なることを指摘したが、このことを念頭に置いて、もう一度高橋（2009）の定式を見てみよう。

（16） a. It +「価値観」を表す述部 + 動名詞
b. 動名詞 +「難易」を表す述部

（=（12））

ここで着目すべきは、「価値観」にせよ、「難易」にせよ、その述部の意味に話者の主観に基づく「評価」が関わっていることである。例えば、次の例を見てみよう。

（17） a. This movie is **worth** watching again and again.
b. This question is very **difficult**.

これらの文における worth、difficult は、主語名詞に対する話者の評価を反映しており、その意味で主観的な述語であると言える。何かがある種の価値を持つことには、必ずしも客観的な基準があるわけではなく、それを認識する人間の受け止め方次第である。「難易」についても同様のことが言える。もちろん、物事や行為は千差万別であり、万人にとって難しいこと、易しいことがある一方で、同じことが人によって難しかったり、易しかったりすることも多い。その意味で、ある事柄を易しいと思うか、難しいと思うかについても、相当程度それを認識する人間の受け止め方次第であると言える。そのことは、次のような例からも明らかである。

（18） a. A： This movie is **worth** watching again and again.
B： I don't think so. It's **boring**!
b. A： This question is very **difficult**.
B： I don't think so. It's quite **easy**!
（19） a. Drop-shipping is **worth** it **for some but not for** all.
b. To speak in class is **difficult for some children but not for** Charlie.

（18a）では、話題となっている映画について、話者Aが「何度も見る価値がある」という評価を下しているのに対し、話者Bは「退屈だ」と別の評価を下している。（18b）も同様に、話題となっている問題について、話者Aが「難しい」という評価を下しているのに対し、話者Bは「易しい」と別の評価を下している。（19）のペアでは、「価値」や「難易」が万人にとって同じでないことが対比的に示されている。こうした例が容認されるということは、「価値」や「難易」が話し手の主観による評価であることを示している。

以上のように、「価値観」も「難易」も「話者の主観に基づく評価」を反映した意味であるという点では大きく異なることはない。それにもかかわらず、構文選択に（16）のような傾向が生じる要因は何か。ここでは、それを「評価を下す要因のありかの違い」に求めたい。まずは、「価値」を意味する述語が好まれる外置文の例を見てみよう。

（20） It's worth making an appointment before you go.

ここで注目したいのは、「君が行く前に（面会の）約束をすること」が worthで表現される「価値」を持つかどうかは、「面会の約束をする」という行為そのものに内在する要因に必ずしも依拠するとは限らないということである。誰かに会いに行く前に約束を取り付けることが「価値」を持つか否かは、約束を取り付けること自体にもともと価値があるというよりも、相手が多忙でアポなしの訪問では会うことが難しいであるとか、相手の性格上あるいは立場上アポなしの訪問は失礼になる、相手がアポを必要とする職業であるなど、その行為を取り巻く「状況」次第である。会いに行く相手が気心のしれた友人、家族など、比較的親しい相手、会いやすい相手であれば、約束を取り付けることの「価値」は相対的に小さくなる。つまり、そもそも人が何かに見出す「価値」は、その人が置かれている、或いはその行為が行われる環境・状況といった「外的要因」からもたらされる傾向にあると考えられるのである。

先に論じたように、外置文の述語は、it を叙述する。そして、今論じたように、worth や no good という話者の評価は、動名詞の表す行為自体に依拠するというよりも、その行為が行われる環境・状況という「外的要因」に依拠する度合いが大きい。この二つのことから、当該構文は、話者が「外的要因」によって動名詞の表す行為に対する評価をくだしていることを表し、その述部が叙述する主語の it は、その評価が依拠する外的要因を指示するものと仮定しよう。

この仮定に基づくと、「述部全体の意味がある種の『価値観』を表す場合、動名詞が‘外置’される傾向が強くなる」（高橋（2009：103））のは、一般的に「価値」という評価がその対象となる行為を取り巻く状況・環境といった「外的要因」に左右される傾向にあるからであり、it はその「外的要因」を指示するものだからだと説明できることになる。

一方、「難易」を意味する述語を好む動名詞主語文の場合はどうか。

（21） Understanding English is difficult.

一般に、何かを理解しにくいと感じる場合、多くはその理解の対象の持つ特徴が原因であることが多い。（21）の場合、話者は英語という言語に内在する何らかの側面に難しさを感じていると解釈するのが自然であると思われる。例えば、（21）を発話する根拠として次の（22a/b）のどちらが自然な解釈を許すかをインフォーマントに尋ねると（22a）が選択される。

（22） a. because its grammar is complex.
b. because my English teacher is not good.

つまり、（21）の場合、「英語を理解する」という行為の難しさは、その行為が行われる環境・状況に由来するものではなく、「文法の複雑さ」のような「英語の特性」という「英語を理解する行為から切り離せない内的要因」によってもたらされたものと考えるのが自然なのである[7)]。

以上のことから、「述部に『難易』を表す表現が生起した際には、動名詞は主語位置に生起する」（高橋（2009：108））という傾向が生じるのは、一般的に「難易」という評価が、その対象となる行為及び行為に密接に関与する人・物（行為の対象など）に内在する「内的要因」に依拠する傾向が高いからだと考えられるのである。

ここまでの議論を簡単な図式にまとめると、次のように表すことができる。

（23）動名詞主語文／動名詞外置文の選択

a. It + be + [外的要因に基づく話者の評価を反映する述語] + V-ing

b. V-ing + be + [内的要因に基づく話者の評価を反映する述語]

さらに、これを動名詞主語文／動名詞外置文の認可条件として定式化すると、以下のようになる。

（24）**動名詞主語文／動名詞外置文の認可条件**

動名詞主語文は、述部に反映される話者の評価が動名詞の表す行為・事態に内在する「内的要因」に依拠する場合に認可され、外置文は、述部に反映される話者の評価が動名詞の表す行為・事態を取り巻く環境にある「外的要因」に依拠する場合に認可される。

この認可条件は、高橋（2009）の定式に関する問題点について妥当な説明を与えることができる。上で指摘したように、高橋の定式では、頻度は違えども同じ述語が動名詞主語文と外置文の両方に生起する場合があることに十分な説明が与えられない。しかし、本稿の認可条件に基づけば、「同じ述語がどちらの構文にも出現しうるのは、その述語自体の意味ではなく、そこに反映されている話者の評価が内的要因に基づくものか、外的要因に基づくものかで決定されるため」と説明を与えることができる。このことは、述部に生起する形容詞ごとに内的要因に基づくか外的要因に基づくかが予め決まっているのではなく、その形容詞の使用を決定する要因のありかを話者がどちらで解釈するかで決定されるということを意味する。

また、高橋の定式では、両構文における述語の頻度に見られる逆転現象も十分説明できない。これも本稿の認可条件に基づけば、「『価値』は対象そのものよりも外的要因に左右される度合いが相対的に大きい意味範疇であるのに対し、『難易』は対象そのものに内在する内的要因に帰される度合いが大きい意味範疇であるから」と説明できる。

以上、本節では動名詞主語文と外置文における述語の「叙述対象の違い」、および「述語に反映される話者の評価が依拠する要因のありかの違い」に着目し、両構文の認可条件を提案した。次節では、実例の観察とインフォーマント調査によりその妥当性を検証する。

4. 認可条件の妥当性：実例による裏付け

4. 1. 動名詞主語文

それでは、動名詞主語文の実際の使用例を見てみよう。まずは、主語に動名詞を取りやすいとされる述語の easy の例である。

（25） As with the old 911, this is a super-car that can be used every day. It is happy pottering through Sloane Square or belting around Silverstone. That is not true of any Ferrari or Lamborghini, or of any other cars with this much performance. Its only drawback, apart from the slightly adulterated styling, is that the Carrera 4 is not as much fun to drive hard as the old 911. It is less entertaining, less of an untamed beast. **Driving this new 911 hard and safely is easy**. （BNC）

これは、「ポルシェ 911カレラ4」というスポーツカーの試乗記の一部である。動名詞主語文 “Driving this new 911 hard and safely is easy.” の前までの文脈からは、新型の「ポルシェ 911カレラ4」のドライバビリティ（運転のしやすさ）が旧型に比べて向上したことが読み取れる。「この新型911を激しくかつ安全に走らせること」を「易しい」と語り手が判断した根拠はこの向上したドライバビリティである。当然、このドライバビリティは新型911の性能に帰すべき特質であり、「この新型911を激しくかつ安全に走らせること」は「旧型よりも向上したドライバビリティを有する新型911を激しくかつ安全に走らせること」を意味する。この意味で、「向上したドライバビリティ」は「新型911に内在する（切り離せない）属性」と解釈され、ひいては「新型911を激しくかつ安全に走らせる行為」に内在する「内的要因」として捉えることができ、ゆえに動名詞主語文が選択されているのである。

別の例でも確認してみよう。今度は、動名詞を主語に取りにくいとされる no use の例である。

（26） Lee Kuan Yew, the man who has ruled Singapore with an iron grip since 1959, is already 92 years old, either older by a few years or younger, depending on who you ask. **Asking him is no use because he is not going to tell exactly**.
（http://singaporedissident.blogspot.jp/2013/08/the-92-year-old-lee-kuan-yew-and.html）

この例では、語り手が「彼に（年齢を）尋ねること」を「無駄」と評価した理由が because節により明示されている。「正確に答えるつもりがない」というのは、「尋ねる」という行為の対象である「彼」の意図である。つまり、この文の意味するところは「正確に答えるつもりのない彼に年齢を尋ねることは無駄だ」ということである。したがって、「正確に答えるつもりが

ない」という「彼」の意図は、「彼」という人物に内在するものであり、ゆえに語り手が「彼に（年齢を）尋ねること」を「無駄」であるという評価を下すうえで、「彼に（年齢を）尋ねるという行為」に内在する「内的要因」となっていると解釈されるのである。

なお、（25）、（26）の文脈において、動名詞主語文と外置文のどちらが適切かをインフォーマントに尋ねると、いずれも動名詞主語文が選択される[8)]。

（27） As with the old 911, this is a super-car that can be used every day. It is happy pottering through Sloane Square or belting around Silverstone. That is not true of any Ferrari or Lamborghini, or of any other cars with this much performance. Its only drawback, apart from the slightly adulterated styling, is that the Carrera 4 is not as much fun to drive hard as the old 911. It is less entertaining, less of an untamed beast. {Driving this new 911 hard and safely is easy./ # It is easy driving this new 911 hard and safely.}

（28） Lee Kuan Yew, the man who has ruled Singapore with an iron grip since 1959, is already 92 years old, either older by a few years or younger, depending on who you ask. {Asking him is no use because he is not going to tell exactly./ # It is no use asking him because he is not going to tell exactly.}

以上、述部形容詞の意味の違い（「難易」か「価値」か）にかかわらず、述部に反映される話者の評価が動名詞の表す行為・事態に内在する「内的要因」に依拠する場合に動名詞主語文が使用されることを見た。

4. 2. 動名詞外置文

それでは次に、外置文の方を見てみよう。まずは、外置文と相性の良い述語である no good の例である。

（29） We lay awake that night listening to the typhoon rage outside. This particular *tai fung*（Chinese for “great wind”）seemed intent on ripping the rickety *minshuku* roof off its foundation and hurling it into the sea. The building clattered like a set of castanets.（中略）**It was no good trying to sleep**. We got out of bed to watch the waves pound the shore just 50 yards from our windows. The sheer density of the water from waves, rain and flooded streets created the illusion that the entire town was under water.

（https://www.latimes.com/archives/la-xpm-1995-11-05-tr-65044-story.html）

当該構文の前までの文脈から分かるように、語り手が眠れない理由は台風、つまり語り手が置かれた状況にある。つまり、「眠ろうとすること」を「無駄」であると評価する要因は、眠ろうとする行為そのものにあるのではなく、それを阻害する「台風」という「外的要因」にあるということになる。

次に、動名詞の外置文との相性が良くないとされる easy が外置文の述語として生起している例である。

（30）This city had been growing. I'd passed through here on a train some dozen years before and it seemed so much larger now. **It was easy driving in the west Texas city**. Traffic was light and the streets were wide and in good condition.

（E. E. Kennedy, The Favor）

小説からの一例である。当該構文の直後の一文（Traffic was light and the streets were wide and in good condition.）に着目されたい。この文は、語り手が「西テキサスの町をドライブすること」を「易しい」と評価した理由を述べているものと解釈できる。つまり、運転行為そのものではなく、「交通量が少なく、道も幅が広く良い状態であった」という環境的な要因に基づいて、語り手が西テキサスを運転するという行為を「易しい」と評価していることが容易に読み取れる[9)]。

最後に、安井他（1976）が非文とする、understandable が述語として使用されている外置文の例を見てみよう。（13c）を実際に使用されている文脈を加えて再掲する。

（31）I appreciate you replying to me, it makes a big difference and helps. Good for you being your wife's official carer, **In your situation it is understandable having palliative care**. The more you talk about your situation the better you feel.

（https://www.cancerresearchuk.org/about-cancer/cancer-chat/thread/caring-for-the-carer-carers-week-2020）

これは、がん患者やそのケアに取り組む人たちの交流サイトから引用した一節である。自らがん患者であることに加え、アルツハイマー型認知症とパーキンソン病を患った妻のケアをしなければならないという男性の書き込みに対する返信であるが、この文における "In your situation" は返信相手のこうした事情を指している。つまり、この例において「（男性が）緩和ケアを受けること」を投稿者が「理解できる」としているのは、この背景事情に基づく評価である。ここでも「緩和ケアを受けるという行為」そのものに内在する要因ではなく、そうせざるを得ない環境・状況という「外的要因」が understandable という述語の使用にかかわっていることが分かる。

（27）－（28）と同様に、（29）－（31）の文脈でも動名詞主語文と外置文のどちらが適切かをインフォーマントに尋ねると、今度はいずれも外置文が選択される[10)]。

（32） We lay awake that night listening to the typhoon rage outside. This particular *tai fung* (Chinese for “great wind”) seemed intent on ripping the rickety *minshuku* roof off its foundation and hurling it into the sea. The building clattered like a set of castanets. (中略) {It was no good trying to sleep./ # Trying to sleep was no good.} We got out of bed to watch the waves pound the shore just 50 yards from our windows. The sheer density of the water from waves, rain and flooded streets created the illusion that the entire town was under water.

（33） This city had been growing. I'd passed through here on a train some dozen years before and it seemed so much larger now. {It was easy driving in the west Texas city./ # Driving in the west Texas city was easy.} Traffic was light and the streets were wide and in good condition.

（34） In your situation {it is understandable having palliative care / # having palliative care is understandable}. The more you talk about your situation the better you feel.

以上、述部に反映される話者の評価が動名詞の表す行為・事態を取り巻く状況・環境といった「外的要因」に依拠する場合に、動名詞の外置文が使用されることを見た。

5. It のステータスと動名詞の機能から見た裏付け

前節では、実例の考察およびインフォーマント調査から、３節で提案した認可条件の裏付けを試みた。ここでは、It のステータスと動名詞の機能という観点から、さらなる裏付けを試みたい。

5. 1. It のステータス

上で見たように、本稿で提案した動名詞主語文および外置文の認可条件は、当該構文を叙述文として見た場合に、それぞれの述語の叙述対象が異なるという仮定を出発点としている。しかし、「動名詞主語文の場合には述部の形容詞が主語動名詞節を叙述の対象としているのに対し、外置文では it を叙述対象としている」という本稿の見立てに対して、「そもそも it はいわゆる形式主語として、後続の動名詞節を後方照応的に指示しているのであるから、結果的に文末の動名詞節を叙述しているという点で両者に違いはない」とする向きもあろう。

ところが、形式主語 it のステータスはそれほど単純なものではない。Kaltenböck（2003）は、it は意味的・統語的に、時間・天候・漠然とした環境を表現する際に用いられる「環境の

it（ambient *it*）」と「指示的な it（referential *it*）」を両端とする連続的段階性（gradience）を成しており、形式主語の it（anticipatory *it*）はその中間に位置すると主張している。次の（35）および（36）のペアを見てみよう[11)]。

（35） a. *It* was 2 o'clock, and [*it* was] still impossible to know when they would come to relieve us.
b. *It* is snowing, and [*it* is] rather difficult to go on driving.
（36） a. At ten *it* was impossible to see anything, and at noon [*it* was] so dark.
b. *It* is difficult to continue and [*it* is] clearly too late for us to return.
（以上、Kaltenböck（2003：243））

（35）では、形式主語（及びその述語動詞であるbe動詞）が等位接続され、前者が省略可能であることが示されている。（36）のペアも同様のテストであるが、こちらは逆に形式主語の文を先行させ、後続する非人称のit（及びbe動詞）が省略可能であることを示している。

同様の現象は、動名詞の外置文でも観察することができる。

（37） a. *It* was 2 o'clock, and [*it* was] no good waiting for him.
b. *It* is no good continuing and [*it* is] clearly too late for us to return.

以上の観察は、形式主語が非人称の it と極めて近い関係にあることを示している（この点については、「環境の it」、「形式主語の it」、「指示代名詞の it」が同じ基底の「抽象的 it」から具現するという Bolinger（1977：82）の議論も参照されたい）。そして、非人称の it は、漠然と周囲の環境・状況を指すという意味で、「環境の *it*（ambient *it*）」に含まれる（安藤（2005：433））。その意味で、こうした it の特徴は「動名詞の外置文における主語の it は話者判断の外的要因（動名詞の表す動作を取り巻く状況・環境）をマークする」という本稿の見立てと極めて親和性の高いものとなっている。

5. 2. 動名詞の機能

このように外置文における it を広義の環境の itと捉えると、文末の動名詞の意味・機能についても自然に捉えることができる。次の例を見てみよう。

（38） a. It's hot.
b. It's late.

（38a）における it は寒暖を表し、（38b）における it は時間を表しているという点で、典型的な「環境の it」である。よく知られているように、この it が指示する漠然とした環境・状況に対し、文末に副詞句を置くことで、その指示対象に一定の制限を課すことができる（cf. Bolinger（1977：80）、Kaltenböck（2003：245））。

（39） a. It's hot *in here*.
b. It's late *now*.

（Kaltenböck（2003：245））

（39a）では、in here を文末に置くことで、it の指示する環境・状況を「（今いる）ここ」に限定している。（39b）も同様に、now を文末に置くことで、it の指示する環境・状況（ここでは時間）を「今」に限定している。外置文における動名詞の機能もこの副詞の機能に並行的なものと考えられる。

（40） a. It was no good waiting for him.
b. It was fun driving in the snow.

（40）における主語の it は動名詞が表す動作・行為が生じる環境・状況を漠然と指示する。その上で、その指示対象を意味的に制限し、当該状況下で具体的に何が行われているかをクローズアップしているのが動名詞部分であるということになる。

ただし、（39）の副詞句と違い、当該構文における動名詞句は義務的要素である。したがって、当該動名詞句を義務的副詞に相当する要素と考えるべきか、それとも安井他（1976）や高橋（2009）のように形容詞の補部と捉えるかについては議論の余地がある。 以下では、現段階における見込みについて簡単に触れておきたい。

安井他（1976）や高橋（2009）の主張の通り、動名詞が述部の選択する補部であるとした場合、その述部に生じる形容詞を他動詞的であると考えることになる。しかし、一般に「他動詞的形容詞」、或いは「二項形容詞」と呼ばれるものは、以下のように義務的に前置詞句を要求するものであり（安藤（2005：19））、直接名詞や動名詞をとることはできない。

（41） a. I am fond {of cats / of playing cards}.
b. Mary is good {at mathematics / at singing}.
d. He is free {from worldly cares / from being subject to someone else's will}.

（42） a. I am fond {* cats / * playing cards}.
b. Mary is good {* mathematics / * singing}.
d. He is free {* worldly cares / * being subject to someone else's will}.

したがって、安井他や高橋の主張を認めるならば、他動詞的形容詞には前置詞句をとるものと、名詞・動名詞を直接とるものの二種類があることを認めることになるが、英語には後者のような意味での他動詞的形容詞は存在しないとされている（cf. 有村（2014：40））。当該構文でよく使用される形容詞は、いずれも「x は価値がある」「x は無駄だ」のように主語のみを項とする一項形容詞としての解釈が自然であり、ゆえに動名詞は義務的な副詞相当語句として扱う方がよいものと思われる。つまり、“It is no use waiting for him.” であれば、一般的に（自然な日本語としては）「彼を待っても無駄である」と解釈されるが、本稿の見立てにしたがって厳密に解釈すれば、「状況は、彼を待つことに対して無価値である（→状況から見て、彼を待つのは無駄である）」ということになる[12)]。

6. 結語

以上、本稿は「It + be + 述語 + 動名詞」の形式を持つ動名詞外置文と、その対となる「動名詞 + be + 述語」の形式を持つ動名詞主語文を考察対象とし、両者の選択がそれぞれの述部の意味に反映される「話者の評価」が依拠する要因のありかによって異なることを主張した。具体的に述べると、動名詞主語文については、述部に反映される話者の評価が動名詞の表す行為・事態に内在する「内的要因」に依拠する場合に認可され、外置文は述部に反映される話者の評価が動名詞の表す行為・事態を取り巻く環境にある「外的要因」に依拠する場合に認可されることを見た。

【注】

*本稿の作成にあたり、英文の容認性についてインフォーマントとして協力いただいたCandice Elizabeth Hensley氏に感謝申し上げる。本論の不備や誤りは筆者の責任によるものである。

1）Huddleston and Pullum（2002：1188-89）は、動名詞の文末生起を認める立場であるが、条件付きである。以下の例を挙げ、自動詞句 was silly のような「短いVP」を超えた外置は可能だが、他動詞句 amused him のように「より長いVP」を超えての外置は不可能と述べている。

(i) a. It was silly breaking the seal.
　　b. *It amused him breaking the seal.

しかし、この「長い／短いVP」が何をもって長い、短いとされるのかは不明瞭である。例えば、(i) の例では両方ともVPは２語で形成されており、単純に語数で分けることはできない。さらに、彼らが非文とする (ib) と類似した用例も確認できる。

(ii) It surprised me his not inviting you to the wedding party.
　　（https://english.stackexchange.com/questions/510153/it-surprised-me-his-not-inviting-you-to-the-wedding-party-is-this-sentence-gram）

2）Postal（1974）は「外置（extraposition）」ではなく、'Shift'という術語を用いている。Postalの'Shift'は、動名詞の主語位置から文末への移動を仮定する点では「外置」と同様であるが、その可否を述語形容詞の意味に帰している点では安井他（1976）や高橋（2009）に近い立場である。

3）当該構文について「当該の構文は'外置'という操作によるのではなく、述部全体の意味が動名詞をその補部として意味的に選択している」と主張する高橋（2009）が、当該構文を終始「'外置'構文」としてシングルクォーテーション付の用語で言及しているのも同様の理由であろうと思われる。

4）Jespersen（1933：328）には、動名詞の意味上の主語が明示された用例が挙げられている。

(i) It was the merest chance my taking these pills.
(ii) It is no use your trying to deceive me.

高橋（2009）によるBNC検索でも同様の例が51例あり、その意味において安井らの主張は妥当性に欠けると言える。

5）高橋は用例数を肯定文と否定文に分けて示しているが、ここでは用例数と割合に着目して再編集している。

6）なお、高橋（2009：108）によれば、この傾向は、文体上の特性（主語位置の要素の長さや、内容の複雑さといった、情報構造的な側面に関係する要因）に影響されることはない。例えば、no good や no use が述部に生起する場合、動名詞の長さや、内容の複雑さとは関係なく、動名詞は文末に生起する傾向にある。

(i) a. It's *no good* [messing].
　　b. It's *no use* [arguing].
(ii) a. It's *no good* [getting to Wembley this season and then finding ourselves at Barnsley in September].
　　b. It's *no use* [attempting to assess this material from a purely intellectual standpoint].

（以上、高橋（2009：108））

対照的に、述部に難易を意味する語（easy, difficult）が生起すると、動名詞の長さや、内容の複雑さとは関係なく、動名詞は主語位置に生起する傾向が強いという。

(iii) a. [Cheating] is *easy*.
　　b. [Launching] is very *difficult*.
(iv) a. So [improving or updating an older model] is quite *easy*.
　　b. [Tactfully joining in and getting out of conversation] can be *difficult*.

（以上、高橋（2009：109））

また、こうした述部の違いによる構文選択は不定詞には見られず、不定詞の場合には「述語の持

つ意味に関わらず、不定詞が文末へ一様に外置される形が典型」（高橋（2009：111））であり、「特定の述語がまとまって形成する意味が、不定詞の外置構文で作用しているとは考えにくい」（ibid.）という。

7）これは、（18）のような一般的な叙述文にも当てはまるものと思われる。（18a）のように、映画に対する評価であれば、一般的には映画の内容を始めとした、「映画そのものに内在する要因」に基づいて「価値」が評価される。（18b）も同様に、（それに取り組む人の能力と照らし合わせたうえで）問題自体に内在される何らかの要因（問題のレベルや専門性など）に依拠して「難易」が判断されるのが一般的であると思われる。

8）なお、（25）－（26）および（29）－（31）については、筆者による文脈の考察に加え、インフォーマントに次のような選択肢を示し、ターゲットとなる構文の解釈について文脈上適切であると思われる方を選んでもらった。以下は（25）についての例である。

(i) a. Driving the new 911 hard and safely is easy because of some inherent properties of the action itself.

b. Driving the new 911 hard and safely is easy because of the situation in which the narrator is put.

(ia）の選択肢は「内的要因」のかかわりを、(ib）の選択肢は「外的要因」のかかわりを確かめることを意図したものである。（25）については、a が選択され、本稿の見立てと合致した。以下、本稿の見立てどおり、（26）でも（ia）と同様の「内的要因」のかかわりを示す選択肢が、反対に（29）－（31）では（ib）と同様の「外的要因」のかかわりを示す選択肢が選択された。

9）この例における「交通量の少なさ」や「道の広さ、状態の良さ」は、西テキサスに内在する特徴であるのだから、ひいては driving in the west Texas city に内在する特徴であり、その行為を easy と判断する「内的要因」ではないかという向きもあろう。しかしながら、これらは恒常的な状態・特徴ではなく、同じ街中でも場所や時に左右される特徴であり、その意味で西テキサスから「切り離せない特徴」とは言えない。

10）（32）－（34）における外置文の容認性については注意が必要である。動名詞の外置文については、容認されないとする先行研究があるように、そもそもそれ自体を認めない英語母語話者がいることも事実である。そのような話者にとっては、一般的に使用頻度の高い no good/no use の例は容認できるのに対し、（30）や（31）のような頻度の低い周辺的な例については容認できない可能性が高いものと思われる。

11）オリジナルは、Morgan（1968：84）によるテストである。

12）“It is no use waiting for him.” に対する自然な日本語では「彼を待っても」のように動名詞部分が副詞的に解釈されることや、少なくともこの文に限って言えば、“There is no use i*n waiting for him*.” と、動名詞部分を前置詞によって導かれる副詞表現でパラフレーズが可能であることも、当該構文における動名詞句を義務的副詞相当語句として捉える上で示唆的であるが、ここでは事実を指摘するにとどめたい。

【参考文献】

有村兼彬（2014）「名詞編入複合形容詞について：統語論と形態論のインターフェイス」『甲南大學紀要．文学編』164，37−48.
安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』東京：開拓社.
Bolinger, Dwight L.（1977）*Meaning and Form*, London: Longman.
Declerck, Renaat（1988）*Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*, Dordrecht, Foris: Leuven University Press.
Emonds, Joseph E.（1976）*A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*, New York: Academic Press.
Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum（2002）*The Cambridge Grammar of the English Language, Cambridge*: Cambridge University Press.
Jespersen, Otto（1933）*Essentials of English Grammar*, London: George Allen & Unwin Ltd.
Kaltenböck, Gunther（2003）"On the syntactic and semantic status of anticipatory *it*." *English language and Linguistics* 7.2, 235-255.
Morgan, Jerry L.（1968）"Some strange aspects of *it*." *Papers from the 4th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 81-93.
Postal, Paul M.（1974）*On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*, Cambridge, Mass: MIT Press.
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.
Rosenbaum, Peter S.（1967）*The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, Cambridge, Mass: MIT Press.
高橋恭平（2009）「動名詞の‘外置’構文」『英語語法文法研究』第16号, 97−113.
寺澤芳雄（編）（2002）『英語学要語辞典』東京：研究社.
安井稔・秋山怜・中村捷（1976）『形容詞』（現代の英文法 第７巻）東京：研究社.

（令和３年11月12日受理）